

機器を検討するプロセスは制度的にほぼありません」。情報が偏り、障害のある人に医療・福祉・教育・地域生活の垣根を越えて一貫した支援の体制が整っていないのが現状だと話す。

松清特任助教は大学で社会学を学んでいた。「就職後の自分を想像したとき、これは違うと思ひ、大学をやめました(笑)」。専門学校で理学療法士の資格を取得し、療育施設で臨床経

ロジェクトの一員となった。

「超短時間雇用は障害があっても社会の中で役割を持って生活できる社会包摂モデルです。障害者が働くためには、スキル、ニーズ、働く環境、生活と就労のバランスなど多角的なアセスメント(評価・査定)が必要です。日本には複数の障害者就労支援制度も、全国15,000以上の事業所もあります。ただ、現行の障害者雇用率制

者支援の領域を越えて、地域振興、産業育成など多様な分野の人が集結しているという。「リハビリの現場にいるときから、誰もが自分が利用できるサービスに簡単にアクセスできる仕組みを作りたいと思っていました。自治体と一緒に地域らしさのあるモデルを作っていくことはすごく面白い」。日々、サステナブルな地域の仕組みづくりに奮闘している。

編集後記



広報委員 齊藤 圭亮 准教授(理論化学分野)

本号では在宅ワークの特集がありました。私も4月に活動制限が本格化した際、慌てて自宅に仕事机・椅子・光回線を導入し、在宅生活を開始しました。そこには発見がありました。第一に、在宅でも十分に仕事ができることです。私が計算機による理論研究をしていることも大きいのですが、Zoomにより遠隔でも支障なく対話ができることは意外でした。特に、4月から研究室に配属された

新入生に至っては、最初から在宅でも例年と遜色なく研究が進んでおり驚きました。第二の発見は、無駄な時間だと思いこんでいた電車通勤が、実は生活のリズムを整える上で重要な働きをしていたことです。今では、朝のコーヒーで仕事をはじめ、夜のブランク(筋トレ)で仕事を終えるという新しいリズムがすっかり定着しました。在宅ワークはまだしばらく続きそうです。

東京大学先端科学技術研究センターについて

2017年に発足30周年を迎えた東京大学先端科学技術研究センター(略称:先端研)は、「科学と技術とアートのハーモニーでインクルーシブな社会を形にすること」を使命とする研究所です。最大の特徴は研究者や研究分野の多様性にあり、理工系の先端研究から社会科学やバリアフリーという未来の社会システムに関わる研究まで、基礎から応用に至る多様な研究を積極的に推進しています。

先端研ニュース 2020 Vol.3 通巻111号 発行日:2020年9月8日

ISSN 1880-540X

© 東京大学先端科学技術研究センター

転載希望のお問い合わせ press@rcast.u-tokyo.ac.jp

発行所: 東京大学先端科学技術研究センター 〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 <https://www.rcast.u-tokyo.ac.jp>

編集: 広報委員会[中村尚(委員長)、岡田至崇、高橋哲、池内恵、近藤武夫、セツ ジイヨン、齋藤圭亮、太田禎生、村山育子、山田東子]

表紙: 「バーチャル先端研公開」キービジュアルの一部(イラスト: 桑田 亜由子)



この冊子は植物インキを使用しています。